

創造都市政策セミナー in 新潟 「スペシャルインタビュー」

『『へうげもの』からみる創造都市〜クリエイターが育ち、活動しやすいまちとは〜』



インタビュアー：太下 義之氏

ゲスト：田村 一氏 陶芸家 激陶者集団へうげ十作

金 理有氏 陶芸家 激陶者集団へうげ十作

藤沢 学氏 株式会社講談社 週刊モーニング編集部

■ 「へうげもの」とは

太下氏：引き続いて、スペシャルインタビューと題されておりますけれど、『『へうげもの』からみる創造都市』のセッションに入りたいと思います。

そもそも、「へうげもの」って何なのかということから説明する必要がありますね。これは後でまた、編集者の藤沢さんの方からご説明いただけるかと思いますが、マンガのタイトルです。新潟市出身のマンガ家、山田芳裕氏が書かれているマンガが「へうげもの」です。実は私も大ファンでコミックスを全巻持っています。現在17巻まで出ています。新潟ご出身というご縁で、この「へうげもの」をグループ名として謳っているクリエイター集団「激陶者集団へうげ十作」の展覧会を新潟市内で開催しています。そこで今日、田村さん、金さんという2人のクリエイターの方、陶芸家の方が登壇されているわけです。というわけで、陶芸家の方それから編集者の方、みなさん広い意味で言うアーティスト、クリエイターとなるわけですが、こうした方々から見て創造性はどのような環境で発揮されるのかとか、創造都市を実現する為には行政や街づくりはどうある

べきなのか、といった視点でお話をいただければと思います。よろしくお願い致します。

最初に、このセッションの契機にもなったマンガ「へうげもの」と作者である漫画家の「山田芳裕」さんについて、ご担当編集者である藤沢さんの方からご紹介していただくのがいいかと思いますので、まずは皮きりにその辺りからご紹介をお願いします。

藤沢氏：ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、「モーニング」は毎週木曜日発売の漫画誌です。山田は新潟市で生まれ育ち、大学生の時、うちの新人賞「ちばてつや賞」に『大正野郎』で入賞しました。デビュー以来、早25年くらいになりますか。非常にクリエイター人気の高い作者ですが、マンガのコアユーザーから支持されているとは僕は思っていないんです。今まで十種競技とか宇宙飛行士とかメジャーリーガーと、いろんなマンガを描いてきたんですが、2005年から始めた『へうげもの』が目下の代表作です。NHKでアニメ化もされましたので、ご覧下さった方もいらっしゃるかと思

います。主人公は古田織部という実在の武将茶人です。信長、秀吉、家康の三英傑に仕えた知らざる傑物なのですが、千利休の後にお茶の第一人者となり、やきもの、茶の湯を通じ、桃山文化の一大プロデューサーとして活躍した人ですね。あまり知られていないのですけれど、よくよく調べていきますと、今に伝わっている文化の源にこの人がいます。そういう凄い人にとりあえず申し上げておきます。

ちょっと話が逸れちゃいますが、先ほどのお話、行政の皆さんの取り組みについて伺っていると、薄々分かってはいたものの、ちょっとびっくりしたことがいくつかあります。皆さんが「マンガアニメ」とおっしゃる中に、我々青年誌のマンガはどうやら視野に入っていないんですね。今回、新潟市の方から「がたふえす」にお誘いをいただきました。ご当地作家であり、山田とモーニングにぜひ協力をせよということだったんですが、アニメ・マンガフェスティバルは明らかに場違いなんです。「マンガ」と一口に言っても、例えば、何年か前の国連生物多様性年であったり、多世代共生といったキーワードみたいに、それほど個体差があると思っています。あえて垣根を作る必要はないだろうという意見もありますけれど、逆に皆さんが「マンガ」おっしゃる際、イコール少年・少女誌、ファンタジー誌のマンガを指している。ほぼ100%そうです。そこと決別していかないと我々青年誌は生きていけないんじゃないかと。アニメ～マンガ～ゲームというリンクが世界的にはありますけれど、青年誌は必ずしもそこには当てはまらないですね。だから山田と『へうげもの』の連載を始める時に、密かなテーマとしたのは、「反マンガ脱マンガ非マンガ」ってことなんです。『マンガ』という枠の中でくくられるのもちょっと抵抗があるし、さっきも言いましたとおり、簡単に括れないほど多様化しちゃっているんで、自分たちが「友達」を探すとなると、アニメでもない、ゲームでもない。そもそも青年誌のマンガというのは、三次元に向かう傾向が強いですし、『へうげもの』のフィールドワークとしては、陶芸家、アーティストたちとの連携しかないと思いました。それが大人

のクロスメディアとかメディアミックスだろうと。あくまでも私見ですが、マンガばかり読んでいる読者が、果たして自分たちを支持してくれる人かどうか、そこから考えていこうと思ったんですね。ある種の大人の意地で、クールジャパン＝オタク文化に対して、あえて決別というか石を投げていかないと、俺たちの居場所はどこにもないよというのが『へうげもの』の原点ですね。

ですから先回りになっちゃうんですが、いわゆるアニメやマンガをビジネスとか事業の対象とされる方々には、その辺の個体差というのを分かっていたきたいですし、例えば新潟市の方々は「マンガ」の多様性をここまで理解しているということが前提になれば、産業、文化、観光、歴史といったものまで、アニメやマンガのリンクに入ってくるんですね。そうなってくると、我々大人のマンガもどこかそういう仲間に入れていただけるかもしれないし、場違いかなとは思いつつ、作者の郷里に敬意を示しまして、新潟でイベントさせていただくことになりました。実際、新潟の地で桃山時代、江戸時代、明治、大正、そして現代といった感じで、いろんなものが共存しておりまして、今までいろいろイベントをやってきた中で、ある面一番いい展示になっているように思います。それは新潟が持っている歴史とか埋蔵量によるものであり、すごく新しい発見ができたことに感謝しております。

■マンガから広がるコラボレーション

太下氏：ありがとうございました。先ほど藤沢さんから「へうげもの」については二次元展開だけでなく三次元に向かっているのだというお話があり、陶芸と接点があったということですが、せっかくなのでクリエイターのみなさんのお話を伺う前に、いろいろなコラボレーションの具定例を簡単にご紹介していただけますでしょうか。

藤沢氏：数年前「細川家の至宝展」というのが東京の国立博物館でありまして、その際宣伝タイアップをさせていただきました。マンガの中に細川幽斎と

いう細川護熙元首相の祖先が出てくるんですが、幽斎の顔を護熙さんで描いちゃったんですね、作者が勝手に。あちらから協力してほしいという話をいただいた際、これはヤバイぞ、元首相に怒られるよと内心焦ったんですが、そんなことは一切なくて、作者の肩に手をかけて写真を撮らせてくださったり、非常に気さくな対談ができたりしたんですね。これは行政じゃなくて、美術館やプロモーターとの連携の一例ですが。

あるいは、やはりマンガの中に上田宗箇という織部の弟子が出てきます。そのご子孫が広島で上田流というお茶の家元をなさっています。いわば茶道界の広島カープみたいな感じですね。本山にあたる和風堂というのが、織部が基礎を作った武家の数寄屋を宗箇が洗練させたものでして、先年特別公開されました。その際、陶芸家の人たちにも協力してもらい、伝統文化とサブカルチャーの融合みたいな催しをやらせていただきました。あとは大阪府の堺ですね。ちょうど一年前ですが、堺といえば利休の故郷、堺幕府とも称される日本の拠点、南蛮貿易の拠点だったわけですけど、毎年恒例の文化財特別公開において、『へうげもの』がメインテーマとなり、桃山時代の文化財でマンガや陶芸の展示をやらせてもらいました。これがご縁になりまして、堺の方が新潟にも協力してほしいということで、今回イベントが実現した経緯があります。箱モノの中ではどうも面白くないとずっと感じていて、リアルに生きている過去、過去から未来へ続いていくものの中で展示ができたということが、新潟市でも実を結んだかなと思っております。

■アーティストと「へうげもの」の出会い

太下氏：ありがとうございました。「へうげもの」には細川元首相もマンガの中に出てきてしまうのですけれど、他にもいろんな人が出てきていまして、例えば虎退治で有名な加藤清正の配役で元ボクサーの具志堅用高さんが出てきているとか、黒人奴隷の登場人物がいるのですけれど、その役でマイルス・デイビスだったり、が何故か出てきたりとか、とて

も凝ったつくりになっていて、分かる人にだけ分かればいいみたいな感じとなっています。

藤沢さんにご紹介いただいたように、マンガからスタートしたコラボレーションというものは、普通の場合はアニメへの展開が多いのですが、「へうげもの」の場合は、陶芸という文化へと面白い展開をしています。さて、今日お越しのお二人は「激陶者集団へうげ十作」いう非常に過激なネーミングのクリエイター集団のメンバーですが、こうしたアーティスト集団の方々とのコラボに至っているわけですね。では、このグループはどんなことをやっているのか、また、そもそも何故こういうことを始められたのかという辺りからご紹介していただけますでしょうか。

田村氏：僕はたぶん一番最初の頃からへうげ十作に関わってまして、その時の多少の経緯を話させてもらいます。美濃に青木良太という陶芸家がいまして、『へうげもの』がすごく好きで、彼がここにいる藤沢さんにアプローチしまして、リアルな陶芸家とコラボレーションができないかという話をしたのが、最初だと聞いています。それについて、面白がって下さったので、とりあえず1回展示会をしようということになりまして、それで青木くんが選んだ陶芸家に私もいたのかな。それが最初、目白のギャラリーで2009年です、たしか。

藤沢氏：活動の発端にはたしかに青木良太さんがいるんですが、彼は若手のトップランナーですけど、古田織部が実際に織部十作という陶工集団を美濃で組織していた史実があったので、そういったモーニング娘、モーニング息子的なスピノフをやろうと、こちらから提案させてもらいました。うちは「モーニング」ですしね。まずは誌上でやきもののグラビアを掲載したところ、うつわの大手企業、京都・たち吉のバイヤーの方が若手の育成にとっても熱心で、是非ともリアルな展覧会をやろうと誘ってくださり、伊勢丹新宿店で初めての催しを実現しました。そこからギャラリーとか、いろんな場所に派生して

いったという流れです。

田村氏：やっているうちに藤沢さんが、僕らみたいな若手の陶芸家の個展によく顔を出してくれるようになって、僕が言うのもなんだけど、けっこう目が肥えていて、その辺の目利きの方より断然目利きになってきたり、それが僕もすごく面白くて。藤沢さんからこういう作家がいるからとメンバーが増えてきて、陶芸家以外の作家も加わり、どんどん層が厚くなっているのが現在の状況ですね。

太下氏：金さんはどういう経緯でこのグループに参加されたのですか。

金氏：僕は途中からの参加になるんですけど、元々『へうげもの』というマンガは知っていて、熱心に読ませてもらってたんですが、たしか現代美術家の村上隆さんとか、その他デザイナー、クリエイターの方がいるんな雑誌のインタビューの中で名前を出されていたので、興味を持って読んでみたらすごく面白かったんです。陶芸と言っても、僕は元々現代美術の方でずっと発表したり美術館などで展示したり、陶芸界のコアな方々からは異端児扱いされているような立場でずっと活動が続けていて、先述の青木くんという陶芸家のパーティで藤沢さんとお会った時にポートフォリオを見せたんですね。その頃、自分も活動する場所の広がりを探していたので、常にポートフォリオを持ち歩いて売り込みなんかをしていたのですが、そこで「なんじゃお前は、変な物作るな」と言ってもらってですね、その後「へうげ十作」という活動をしているので、参加して欲しいか」と誘っていただいて、それまで茶の湯に関しては全く門外漢でしたし、敷居が高いようなイメージがあったんですが、藤沢さんに是非お前のテイストで茶器を作ってくれないかというお願いをされて、それが自分が器ものとか茶器を作り始めるきっかけだったんです。

『へうげもの』とのコラボイベントというのは、それまでの客層とは全然違う個性豊かなお客さんが

観に来てくださるので、そこでの出逢いは自分にとって大きな広がりになりましたし、特に印象的だったのは、たしか伊勢丹での展覧会だったんですけど、どこその中学生がお年玉を握りしめて、DSを買うかお茶碗を買うか迷ってお茶碗を買いに来たという話があって、普通の陶芸家の展覧会ではありえないというか、『へうげもの』というマンガの力を思い知ったりしましたね。そのご縁でずっと今もお付き合いいただいています。

太下氏：ありがとうございました。田村さん、何か補足があればお願いします。

田村氏：藤沢さんから、今までこういうことをやりましたという紹介があったんですけど、あれはまだとてもやさしいほうで。僕がすごく嬉しいのは、今の金くんの話もそうですが、無茶なことも本当やらせてもらってホント楽しいんですけど、例えばあるミュージシャンの子たちのライブイベントで、TシャツとかCD売っている横で茶碗売ってみたいなとか、そんなこともやってますね。金氏：ぐい飲みが意外に売れました。田村氏：ちゃんと売れたっていうのがすごく良かったよね。そんなこととか、まさにアウェイの場所でもいろいろやって、そのことがまた、僕らとしてはすごく同時代を感じるんですね。僕らが日頃聴いている音楽を奏でているような人たちのライブで、自分たちの茶碗を売る。僕としては感動してしようがなかったですね。さっき藤沢さんが青年誌独自の立場という話をしてましたが、僕もそれはすごく感じています。「へうげ十作」の頭には「激陶者集団」と冠が付いているんですが、本当に僕はある種、格闘技の気分で、リングに放り込まれたような感じで、『へうげもの』と関わっています。それがたぶん、自分という作家が「へうげている」ということになるのかと思ったりしています。佐々木中さんという同世代の哲学者がいるんですけど、彼のことがすごく好きで、彼の本を読んでいた時に、彼はいわゆる萌えだったりオタクについては一切語らないんですね。今の音楽はこう

で昔ながらの音楽はこうだ、でも哲学もこうだ、哲学者の本質はマイルス・デイビスだ、マイルスを古いというミュージシャンはいないんだし、哲学が今それを古いということなんてありえないじゃんと彼が言っていて、その言葉がすごい心に残っているんですけど、自分がこうして関わっている仕事だったり制作を通じて、いろんなジャンルのいろんなことを心に留めながら作っている感じですね。

■作品紹介、制作の背景

太下氏：ありがとうございます。「激陶者集団へうげ十作」というすごいグループ名ですが、現在、新潟市内で展覧会やっています。この会場の近くでは「旧齋藤家別邸」、ちょっと離れたところで「北方文化博物館」でも開催していますので、実際ご覧になるとよく分かるかと思うのですが、もしみなさんの作品の画像があればご紹介いただけますでしょうか。

金氏：イベントのチラシでは、僕の作品は左下と右上ですけども、この写真も僕の作品ですね。その下は前川多仁さんという京都の染織作家、この方もかなり変わった奇抜で面白い方ですけど、その方のテキスタイルの上に、マネキンの頭を石膏で型どりして、焼き物に置き換えて、なおかつ一人ずつ表情を変えていくという、群像がテーマの作品です。自分の知名度が上がったのは、チラシにも使っているひとつ目の目ん玉がある作品です。陶芸を始める前から SF 映画やアニメやマンガがものすごく好きだったので、その造形感覚が入っていると思いますね。手塚治虫から始まり、ガンダムの解説本で構造とかじっと見ていたりしまして、思春期になってからは『エヴァンゲリオン』とか『攻殻機動隊』にすごくはまったという感じですね。

太下氏：へうげ十作に関わる皆様の、その他ご紹介していただける作品はないでしょうか。

藤沢氏：今回初めて参加してくれた作家で、京都

の表具屋さんの若ボン・井上雅博さんがいるんですけど、掛け軸の画像ございますか、その屏風がそうです。マンガと現代アーティストと何代も続く伝統工芸作家が組んでいるという、その幅広さが特長ですかね。太下さんも読んでくださった最新刊の画はボンカレーのいわばパクリです。大塚食品と勝手にコラボさせてもらいました。非公式もいいところですけど。

金氏：現代美術の方でも発表を続けているんですが、ホワイテキューブという真っ白な箱の空間で展示することが多いんです。どのような作品を持ってくるにしても、作品だけ浮き立つようにと真っ白な空間に展示されているんですが、『へうげもの』のイベントで、普段は見学すら許されないような重要文化財の建物とかで、展示させてもらうというのはすごく面白くて。ホワイテキューブは自分の作品をどう見せるかという展示空間ですけど、旧家なんかに展示するときは建物との勝負という高揚感がすごく出てきたので、ホント貴重な機会をいただいたなと思います。

田村氏：今回新潟でも『へうげもの』の原画と僕らの作品がいっしょに展示されてるんですが、中にはこういう織部の向付とか、マンガに触発されたコラボ作品もあります。そういう二次元と三次元の共存が実に面白いんです。僕は普段磁器でものを作っています。「磁器ってなんでもできるんだぜ」というのが僕の裏テーマにあるので。普段僕はこういう、コラボ的な仕事はしないのですが、自分の土で実際ひいてみて実際横に並べると面白いんじゃないかと思って作った作品です。齋藤家の方に展示してありますので、時間があればぜひ。やっぱり実在する物だったり、その建物だったり、実際に知っていると、こういう感じで自分なりの解釈で物を作れるんですね。広義ではなくて自分の作り方で自分の素材で、『へうげもの』と関わっていると、こういう仕事の仕方が、決していつもというわけではないですが、できたりするのが嬉しいですし、これを作っ

ていて、すごく新しいクリエイションに繋がっていくという瞬間が何回ありまして、それは僕らの中でかなり大きなことです、はい。

太下氏：せっかくの機会なので、田村さんの他の作品もご紹介いただけますでしょうか。

田村氏：これも何だろう、どんどん綺麗に破けていくとどうなるだろうという破け袋。器は破けていくけれど、それをどう綺麗に破くか、というのが自分の中でテーマの作品ですね。これは片口ですけど、これがとっても好きで。違う何かを想像させることで。僕は金くんと違って現代美術のこととか知らずに作っていて、独学で陶芸始めたので、まっとうな作り方もよく分からないので、自分なりに器を作ってきたと思ってます。でも『へうげもの』と関わるようになって、金くんは勿論そうだし、十作の仲間たちの作品を見ると、悪い言い方をすると芸の肥やしにしていますので、それはそれで楽しいことです。

太下氏：藤沢さん、だいぶ目が肥えてこられたというお話でしたけれど、藤沢さんの目からみてこれらの作品は、どういうふうに感じられるのでしょうか。

藤沢氏：青年誌一般に、さっきも言いましたけれど、おおむね現実～形而下に向かうものなので、例えば「島耕作」は皆さんご存じかと思いますが、あの作品を担当していたら当然企業を取材する、サッカーのマンガを担当していたらサッカーを取材するわけで、そこは結局、各作品の重要なリンク先になるわけです。『へうげもの』の場合、やきものから直接連想される伝統工芸、民芸というカテゴリーからはあえて離れまして、田村や金のように、現代の個人作家でオリジナリティーの高い活動をしている人を、こいつらこそ「へうげもの」だというオマージュを込めつつ、協力をお願いしています。ものづくりをしている人、なおかつメディアアートではな

くて、実際に立体物、フィジカルなものを作っている人に対して、敬意を捧げたい、同士愛を持ちたいと思ってるんです。参加作家の大半が、世代のトップランナー的存在であり、僭越ですが、『へうげもの』との関わりの中で注目されつつある若手もいますので、独自のスピンオフとして長く続けていきたいと願っています。再来年、2015年は主人公の織部没後四百年にあたっていて、大規模な展覧会がいくつか行われると聞いています。『へうげもの』を核にして独自の企画を東京でやりましよう、某新聞社と画策しているのですが、二次元からいかに離れて、フィジカルをどう見せるか、マンガとしての実存というのでしょうか、作家と作品の実存をどう見せるかということをいつも考えています。

■「アーティストが育つまち」について考える

太下氏：ありがとうございます。本日は前半のセッションで3都市のプレゼンテーションを聞いていただき、後半は実際にクリエイティブなことに関わっている編集者とアーティストのみなさんにお越しいただいているわけですが、実際にクリエイティブな活動をされている方からみて、自分たちの活動といったものを、もっとやりやすくする為に、行政や都市にこういうことをしてくれたらいいのにと、日頃思っていることがあれば、是非教えていただきたいと思います。今日は冒頭でご紹介したとおり、北は北海道から南は沖縄まで、全国から様々な自治体の方が来ていますので、一番いい提案をしてくれる街に移住されてもいいのではないのでしょうか。

田村氏：僕は秋田で制作しています。僕が作っている土地は秋田市の秋田駅から、17キロくらい山の中に入っていた所です。そこから300m進むと県の公園なので、家が建てられなくなるようです。なので僕の家は住所は家ハツレといいます。元々家の外れだから家外れだったと聞いています。ここは雪が今年1m50cm以上積もりました。木が半分くらい埋もれました。でも僕はこの土地がとても好きなので、動こうとは今後も思いません。これ

は僕が最近関わっている、秋田県の上小阿仁村でやったアートフェアの時の作品のイメージです。上小阿仁村には人口が2,500人くらいしかいません。その中でも一番奥の奥の集落で、17人しか住んでいないんですね。会場は屋外にも建物の中にもあるんですが、僕の作品はこの廃校、今は公民館で展示されました。周りは壊れた建物ばかりだった。この時の作品ですね、教室の一部屋に展示したものです。先ほど話を聞いていまして、すごく感じたのが、ここってもう本当に世帯が7軒、17人しか住んでないとかいうところなので、賑わいがどうかシャッター商店街がどうか、そういうレベルではなくて、なんていうのかな、もう確実に10年以内にはこの集落誰もいなくなっちゃうよね、っていうのが誰にでもわかるような所です。そういう所で、じゃあなんでこういうアートフェアをやるかっていうと、これはもう本当にエンディングノートみたいな、最後の遺書みたいな、ここに人がいたっていうようなことを証明しているかのように見えそうですね。そのためのアートというのはとても僕は健全だと思っていまして、だからここでやるっていうのはすごく意味のあることではないかと思っています。先ほど行政の方々が話されていたことと反対なのかもしれないですけど、人がいなくなるっていうようなことを、もう正直避けられない側面が、たとえば秋田県には間違いなくあるわけで、そういう現実に対してもこういうお見送りみたいなことはできるんじゃないかと僕は思っています。お金を生むも生まないも、とにかくやると。そういうことを考えるのも、ひとつの行政の役割なんじゃないかなと、僕はこのアートフェアに参加してすごく感じました。今回は都市っていうお題をいただいたんですけど、秋田は本当にもう都市とか考える都市ではないなと思ったので、あえて説明させて頂きました。

太下氏：ありがとうございました。今、田村さんがおっしゃったように、人がどんどん減少してってしまうことは止められないという点は、確かにその通りだと思います。そして、そういう限界集落の

存在を前提としてアートプロジェクトを展開しているのが、新潟市の近くで言うと「越後妻有アートトリエンナーレ」になるわけですね。

田村氏：すみません、補足を。このフェアも去年から始まっていまして、越後妻有アートトリエンナーレの飛び地開催ということで始まりました。

太下氏：はい、それでは金さんはいかがでしょう。

金氏：僕は資料を何も用意してこなかったんで、自分の経験として行政の方と一緒にやって助かったなということからお話ししたいと思います。まず最初に、横浜市で横浜トリエンナーレというすごく大きな国際展があるんですが、やきものメディアとして、やきものを素材として使っている作家として僕が初めて呼ばれたという自慢から入るんですけど。その際、美術館の方とお仕事して、普段はプライマルギャラリーとかコマーシャルギャラリーとか呼ばれる、その作品の売買自体が商売になっている場所での発表なので、個展と言っても売り上げを出さないといけないというプレッシャーがあったりするけれど、予算が行政から年々減っているとはいえ、僕らの単位から見たらすごく潤沢に出ていたんで、作品の輸送であったり、いろんな手配にすごくよく動いてくださって、本当に作品をどう見せるかということに集中して展示できて、すごく楽しかったという経験がありました。受付の横に「モーニング」が展示されていると思いますが、その横に一冊、赤い冊子が置いてあって、それは僕が今年3月にニューヨークのチェルシー地区で行った「JOMONISM」（ジョーモニズム）という展覧会のアーティスト紹介です。展覧会の発端は、ニューヨークのギャラリーのディレクターから、なかなか面白い企画がない、経費を全部負担してくれるなら、その場所自体は自由に使っていよいよというお話があって。ただ海外の展覧会だしお金はないし、そういう話があるけど、どこかから予算出ないかなと言って回っていたんですね。そしたら、青森県が縄

文土器とか遺跡とかを観光資産として活用しようと予算をつけていろいろ活動しているんですけど、その間に入っている JOMONISM という、ねぶた祭や縄文土器にまつわる展覧会を東京で開催している NPO があるんです。そのメンバーの方がたまたまその次の年度に何をするかという会合に僕を連れて行ってくれて、そこでプレゼンしたところ、その展覧会に予算を付けようとして取りまとめてくださり、青森県から運送費や運営資金などの予算を頂いて、実際にニューヨークで展覧会ができたんですね。そもそも「縄文」という言葉自体、アメリカの方はほとんど知らなくて、「なんだそれは、神道なのか？」と。みんななぜか神道が好きで、いろんな単語がたくさん出てきたんですけど。そういう意味でもきちんと宣伝という成果を出せたと思うんですね。向こうのメディアに取り上げられたし、青森新聞の記者の方も来てくださって、結構大きな記事を載せていただいたし、行政の側の方も市民から面白い動きやっているねと反響があったということで、彼らも宣伝にはなったし、僕たちも NY というそのアートの本場で展覧会を開催できたし。とにかくそういった形で、使い道がかなり自由な予算を出してくださったというのはすごく助かりました。それでちょっと味を占めてといいますか、文化庁の芸術家支援というのがあるんですけど、海外に作家を派遣する支援制度です。ただし、苦情ではないですけど、推薦人をつけるのが結構大変だったり、作家同士で推薦人の奪い合いになったりと、今年から変わったみたいですが、どこかの団体を通さないと応募できないといったように手順が結構複雑で、今までちょっと出しそびれていたのですが、それにチャレンジしようかなという気持ちが出てきました。その前段階としてというか、京都市でも作家に対する助成を行っていて、年間300万円というお金が、海外に行ってもいいし、展覧会やってもいいし、かなり使い道が自由なものがあって、来年度の募集に応募させていただいているので、ぜひプッシュしていただければなと思っています。

大阪にアトリエを構えて活動しているので、芸術

にまつわる鑑賞であったり、発表であったりとか、京都に行くことが多いんですけど、京都は「HAPS」という施設があったりとか、かなり芸術に対する支援が充実しているなという印象なので、そういった形でどんどん柔軟な支援制度というのができていくいいと思いますね。先ほど行政の方のプレゼンテーションを伺って、自分たちが想像していた以上に柔軟に、しかも具体的に提案されて実行されているのだなと実感としてあったんですけど、それこそ知人のアーティストがアトリエの引っ越し先を探していた時に、少し郊外のシャッター通りになっている商店街の一店舗をアトリエとして安く借りられたというようなお話があったので、そういうこともどんどんやっていただければ、本当にお金がない作家というのは、場所はどこでもいいので、とにかく作りたいという気持ちがあると思うので、人も増えるかな、という感じがします。

太下氏：金さんありがとうございました。先ほどおっしゃった、アーティストを海外に派遣する制度というのは在外研修制度のことだと思いますけれど、文化庁の内田政務官もしっかりメモをされていたので、きっと何か良い方向に変化があるのではないかと思います。それでは、藤沢さんいかがでしょう。編集者の立場もありますし、ある意味、「へうげ十作」というアーティスト集団をコーディネートされている立場もあるかと思いますので、その両方の立場からは是非コメントを頂ければと思います。

藤沢氏：とにかく行政の方々はグランドデザインを考えられて、すごくマクロにやってらっしゃると思うんですが、例えば少年ジャンプがメジャーリーグだとすると、我々は新潟アルビレックスくらいの存在なので、だからこそこういうアナログなことができるんですけども、やっぱり文化というのは「人」だと思うんですよね。未来志向だけだと、大人の表現はできません。少年誌やファンタジー誌は非実在少年を描くわけですが、俺たちは酒も飲めばタバコも吸う、博打もやるわという、ある種リ

アルな人物像を追及していくわけです。『へうげもの』の山田の持論はですね、日本とか日本人とかカギカッコ付きで考えないと掘り下げられないと。先ほど申し上げたように、それほど多様であると。たとえば新潟には新潟の独自の歴史があるわけですね。ですから我々も個体差とか地域差を区別して、いろんなものを差別化して、ある意味ミクロに表現や制作をやっていきたいと思っています。それから、今回こういう場所にお招きいただいてすごく良かったと思うのは、いろんな縁でここにいるんですけど、行政の方々と交流がなさすぎるなと痛感したことです。我々には皆さんのご苦労がなかなか分かりませんし、逆に行政の方は我々のマンガの制作現場がどうなっているか、作家の創作活動が個別にどうなのかとか全くご存じないと思うんですね。あまりにも共通言語がなさすぎるなと。だからこそ、もっとインタラクティブに、双方向にやっていかないと、例えば産学官連携とかいったビジョンがありますけど、産業と行政の連携はきわめて不十分じゃないかなと思います。数年前に新人賞の責任者ということで、主に関西の芸大で臨時授業をけっこうやらせてもらったんですけど、その時思ったことは、マンガ学科から少年誌には人材を出しているけれど、うちの雑誌に美大芸大の出身者はいても、マンガ学科出身はたしか一人もいません。それはなぜかという、やっぱりマンガ学科とかマンガ学校が、関係者がいたら申し訳ないんですが、大人の目から見ますとどこか温室になっているんですね。カリキュラムの問題もあるんですが、単に好きこそもの上手なれじゃ教室から作家は育たないと思うので、例えばマンガ専攻の子にやきものをやらせるとか、学際的に平面の子に立体をやらせる、ワークショップとかインターン、地元で根付いた形である種労働体験させるとか、街の活動に参加させるとか。そういうことがないとやっぱり人材は育たないんじゃないかというのが、非常に重要な悩みどころになっています。拙いとはいえですが、これ以上純粋なオタクの人が増えてしまうと、自分たちのように興味が雑多な人間からすれば、ラーメンしか食べて

いないヤツからラーメンうまいよと言われても、あんまり説得力がないなというような話です。

とにかく「都市」というのはやっぱり雑多性、雑食性が強いものだと思いますし、大人の媒体はそういう多彩な表現を目指しています。行政の方々にはもっと広く、もうひとつ別のマンガといえますか、これまたたとえば話ですが、ヤクルトにいたホーナーが「日本にはもう一つ別の野球があった」と言い遺して一年で帰っていきましかつ、それくらい個体差があるし、マンガの裾野はものすごく広いんですね。最初に申しましたように、それぞれリンクできる先というのは千差万別です。産業、観光、歴史、文化など、幅広く連携を考えていただけたら幸いです。山田芳裕という作家は本当に偉才だと思いますし、新潟市から生まれた作家の中でも飛び抜けた才能だと個人的には思うんですね。そういったこともぜひ知っていただいて、大人のマンガをより地域振興に活かして頂けないかなというのが、今日のお願いの一つです。どうぞ今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

太下氏：辛口のコメントを含めてどうもありがとうございました。電気も付いてだいぶ終わり感が漂ってまいりました。では田村さん、追加のコメントがあるようでしたらどうぞ。

田村氏：今回の展覧会に参加している十作の仲間が三人来てくれました。ハンチングをかぶっているのが大阪の増田敏也、髪型が武士の人が千葉の小孫哲太郎、それから『へうげもの』にかぶきものの造形モデルとして登場して、華々しく散った京都のかのうたかおです。すいません、内輪のことで。

太下氏：ありがとうございました。マンガの登場人物までリアルに登場してしまいました。では最後に大阪市立大学大学院教授の佐々木先生から総括的なコメントをいただけますでしょうか。

佐々木氏：時間も来ているのでひとつだけ。非常に緊張感がある話で面白かったです。私は創造都市

論の中で、都市全体がいきなり創造的になるのは難しいけれど、今日の話にあったようにですね、「創造の場」というのはしばしば周辺で起こるんですね。だから中心よりむしろ周辺の方が面白いので。家ハツレというのは非常にいい言葉ですね、まさに「創造の場」ですね。片方でセレンディピティという言葉があって、探しているものと違う価値あるものを見つけることがある。それを仕掛けるのが藤沢さんかもしれないですね。古田織部は極めて前衛的な人で、彼の仕事は現在では伝統工芸と言われるけど、全てその時代にはもの凄く前衛でアバンギャルドなものです。こういう物をオールドメディアと思われたようなマンガで表現したのが二重三重の意味で面白いのです。文化産業というのは普通の産業と違うので、意味をいくつも重ねあわせて読み替えていくものです。そこに新しいものが発見されて、その価値が今度は大量生産のマンガで、大人のマンガでやられたなと思いながら感心して聞いていました。どうもありがとうございました。

金氏：今のお話もそうですし、先ほど藤沢さんが「やっぱり人だ」と言いましたが、行政が支援する場合は箱モノとかイベントの方が目に見えやすいですし、短期的にも結果が分かりやすいので例が多いと思うのですが、僕もやっぱり「人」だと思うんですね。自由度の高い助成を受けることもすごくありがたいんですが、ただお金を貰うだけでは使い道をどうしていいか分からない作家もたくさんいると思うんですね。助成金は生活に使えないことが多いし、行政と作家の間でマネジメントする人材っていうのが少ないと思うので、そういう点にも留意しつつ支援していただければと思います。藤沢さんとか本当にそうですねよね。こんな面白い展覧会ばかりを企画されているので。

太下氏：佐々木先生、どうもありがとうございました。金さんが指摘されたのは、いわゆるアートマネージャと言われる存在のことですね。これについては、文化庁さんでも大学を支援する形で全国的

に養成しようということで動いています。本日はアーティスト、クリエイターの立場から貴重なお話をいただきました。どうもありがとうございました。だいぶ時間が押してしまいましたが、是非皆さん旧齋藤家別邸で展覧会を開催中ですので、お出かけください。非常に面白い内容になっております。どうもありがとうございました。